

公営展示場の

実現を願っています

福岡県版「現代の名工」

工房かねよし代表
大川伝統工芸振興会会長 鐘ヶ江 典夫さん



宮崎大学卒業後、約二年間のサラリーマン生活を送る。そして、職人であった父の元に飛び込み、以来約四十年間この道で研鑽を重ねてきた。「私の場合、組織の歯車の一つとして生きるのにはラクでもやりがいを感じませんでした。ものづくりの道がとても魅力的に思えたのです！」

こう語るのは、昨年十一月二十一日に、福岡県版「現代の名工」に選ばれた、鐘ヶ江

典夫さん。鐘ヶ江さんが伝承する技術は、透かし彫り技法を生かした繊細で立体的な木彫り工芸「大川彫刻」である。江戸時代末期に始まった大川彫刻は、一九八七年度に県の特産工芸品に指定されている。平成十五年からは大川伝統工芸振興会の会長としても活躍しておられる。また久留米大学付設中、高校の非常勤講師として、木彫刻の楽しさと技術を学生たちに伝えている。





昨年、福岡県版「現代の名工」に選ばれる

ス、いぐさ、和家具を扱う職人達が参加している。この会は、大川インテリア塾の高度技能者養成講座の講師陣を輩出する、技能者グループである。

今年の一月初六日から十一日まではアクロス福岡二階匠ギヤラリー交流ホールで桐箆笥の高橋敏之さんと二人展を開いた。五回目である。卓越した技法を使った、七十点の作

品を並べた。楽しい雰囲気での展示である。この模様は朝日新聞にも取り上げられた。鐘ヶ江さんは屋久杉を用いた作品を多く展示した。また木彫りの実演を行った。来場客の中で「大川で、このようなモノができるのですか!」と言った意見が多かったという。鐘ヶ江さんは、「これから職人を目指す若者のためにも、もっと多くの人たちに大川の優れた伝統技術をPRしたいですね」と語る。



細部の彫刻が目を引くランマ

新しい技法として、取り組んでいるのが、寄木や象嵌の技法を取り入れた「新しい大川彫刻」である。「従来のレリーフとは異なった木肌の美しさ、色合いの美しさが斬新です。この技法は、家具や建具などへの付加価値を加えることにも適していると考えています」。

また、力を入れている別の分野が、他業者とのコラボである。「それぞれの長所を生かしあうことでより魅力的な製品ができ、他産地との差別化も図れる」という。

たとえば、和家具の鏡板・パネル、またサイドボードの前面に彫刻の技法を使うことである。「量産時代が過ぎた今、伝統工芸を含めたコラボによって、付加価値の高い製品作りを試みていきたいと思っています」。

さて、夢を聞いてみた。

「一つは、若い職人達が生活の裏付けを持ちながら、生き甲斐ある仕事ができる環境づくりには精一杯努力したいと思っています。もう一つは、展示場の設置です。各地で展示会を開催するたびに思うのですが、お客さんが大川に来て楽しめる家具の総合展示場の必要を感じます。これは私たちができる、お客に対する最低限のサービスではないでしょうか。過去の「夢追い人」の中でも非常に魅力的な方々が多数登場されています。これらの人たちの作品を少しずつでも展示できる公営の展示場の実現を心から願っています」。